

『将軍の世紀』を語る・後編



歴史学者
やまうちまさゆき
東京大学名誉教授 山内昌之氏

1947年生まれ。
武蔵野大学国際総合研究所客員教授。モロッコ王国ムハンマド五世大学特別客員教授。富士通フューチャースタディーズ・センター特別顧問、アサガミ顧問。
2023年より横綱審議委員会委員長。
主要著書に『オスマン帝国とエジプト』、『スルタンガリエフの夢』、『岩波イスラーム辞典』（共編著）、『中東国際関係史研究』など。



レザーノフ(右) (国立公文書館デジタルアーカイブ)

歴史学者山内昌之氏の名著『将軍の世紀』が本年4月に刊行された。関ヶ原合戦から幕末までの政治中枢の姿が、圧倒的な臨場感で描かれている。10年近い歳月をかけて著された、江戸のダイナミックな世界の一端を著者に聞いた。

十一代将軍家斉、徳川の終わりの始まり

文化露寇

江戸後期の文化年間、ロシアのレザーノフが武力で開国を求めさせた。部下に樺太と南千島を襲撃させた。いわゆる「文化露寇」です。幕府は撃退すべくもな

く、公儀の武威は失墜しました。時の将軍家斉は、対ロシア政策の充実にあくまで消極的でした。ロシアの南下が現実のものとなっているのに、「今のままでいい」という感じなのです。蝦夷地の政策は金がかかる。何かを削らないといけない。それでは、自分や大奥が贅沢できない。要は金を出したくないのです。

在職50年。大奥にこもり多くの子供を儲けた家斉の時代に、徳川政権は終わりの始まりを迎えました。なお、蝦夷地開発の担当役人たちには優れた人材が多かった。間宮林蔵や近藤重蔵は蝦夷に渡り地図を作りました。しっかりと開拓政策を考えていたのです。

大塩平八郎の乱

天保8年(1837)、大塩平八郎の乱が起きました。末端とはいえ公儀の内部から公然と反幕府の烽火を上げたのです。大塩の檄文は、彼の教養の広がりや無駄のない文章力、抑制した憤激と内に秘めた情熱が混然一体となって独特な魅力を出しています。家斉の徳川政治体制を厳しく告発しました。

小規模ながら旗本、御家人が出

兵した市街地での実戦であり、高原の乱のこのかた200年ぶりの合戦でもありました。「大塩焼け」と呼ばれた火災は大阪市内の5分の1を焼き尽くしています。

大坂東町奉行はじめ与力、同心の怯懦と無力ぶりは実に呆れるほどでした。唯一、与力の坂本鉦之助らが奮闘して幕府はかろうじて面目を保った。この事件は、歴史の大きな転換点となりました。



大塩平八郎(大阪城天守閣蔵)

ペリー来航から長州戦争へ。 幕末の十二代將軍家慶、 十三代家定、十四代家茂

ペリー来航と烈公徳川斉昭

アメリカ東インド艦隊司令長官マシュー・ペリーは、嘉永6年(1853)6月、黒船4隻を率いて浦賀沖に姿を現しました。老中首座は阿部正弘。彼は、調整型の人物で誰に対しても良い顔をする傾向がありました。賢君として声望の高かった水戸藩主徳川斉昭を「海防参与」として幕政に参画させたのです。これは、大きな間違いでした。

阿部は自分なら斉昭を制御できると思ったのかもしれませんが、しかし、斉昭は面白い人物ではありませんが、自己中心的で身勝手、將軍をも無視するような人間でした。わが国は、開国か戦争かの岐路にありました。ペリー艦隊が半年後の来航を約して浦賀沖から遠ざかると、阿部は全国の大名家や衆庶にペリー来航への対応策について

意見を求めます。

斉昭の提出した案は、非現実的なものでした。「黒船に乗り込み対談するかのように装って、敵將を突き殺せ」というのです。どうやって黒船に乗るかという算段もない。この点に関する限り、同時に提出された新吉原遊女屋主人の上書の方が、御三家当主の斉昭よりはるかに实际的でした。

大老井伊直弼と日米修好通商条約

当時の国際情勢、アヘン戦争からアロー戦争に至る清の状況をみれば、日米修好通商条約の締結は妥当な判断でした。大老井伊直弼は、仮に条約締結を拒否した場合、国がどうなるかを考えて決断したのです。ご承知の通り、その後、戊午の密勅、安政の大獄、桜田門外の変と歴史は大きく展開します。



嘉永7年(1854年)横浜への黒船来航



寺田屋

島津久光と寺田屋事件

文久2年(1862)3月、薩摩藩の島津久光は公武合体と幕政改革を促すため、千人以上の人数を率いて京都へ向かいました。彼は、過激な尊攘浪士を嫌悪していました。また、西郷隆盛とは終生ソリ

が合わなかったのです。この時、自らの命に従わない西郷を再度流刑に処しています。孝明天皇からは、浪士蜂起の不穏な企てを取り押さえるよう命じられました。同年4月、寺田屋事件が起きま

と鎮撫使一行が激突した。薩摩人同士は斬り合いでした。

久光は自分を支える薩摩藩精忠組の一部であっても過激尊攘派を切り捨てる決断をしたのです。

生麦事件の虚実

文久2年5月、島津久光は江戸へ向かいます。勅使を外護する名目でした。①將軍上洛、②五大老の幕政参画、③慶喜の將軍「後見人」春嶽の「大老」就任を幕府に求めたのです。

その帰途に起きたのが有名な生麦事件でした。従来は、英国人の一行が馬で久光の行列に割り込んだため無礼討ちに遭ったと解釈されてきました。

しかし、この事件は謎が多い。明治に入ってから久光やアーネスト・サトウの言によれば、英国



島津久光 (出典:近代日本人の肖像)

人は行列に割り込んではいない。道路の脇を通ろうとしているところを、自頭流の達人奈良原喜左衛門らが斬りかかったというのです。事件勃発と同時に幕府に入った「風説」(情報)も同様の内容です。わざわざ無礼の態度をとったかのように申立て殺害した薩摩人の「実にくむべき所置」と報じています。

奈良原らは、意図的に異人斬りをしたのでしょうか。彼らも久光と尊攘派との間で煩悶していた。異人斬りにより、薩摩藩も久光も攘夷の方向に変えることができると思った。史料を読んでいくと、そうとしか解釈できないのです。



生麦村

十五代将軍慶喜と薩摩マキヤベリズム

四侯会議の失敗

慶応3年（1867）5月、京都で四侯会議がもたれました。島津久光、松平春嶽、伊達宗城、山内容堂の4名です。喫緊の課題である兵庫開港問題と長州処分問題が話し合われました。その結果を踏まえ、四侯は二条城で将軍慶喜

と交渉したのです。

四侯は、長州への寛大な処分を優先する二段階方式を求めますが、将軍慶喜は、あくまで両問題の同時解決にこだわります。また、久光以外の三侯は、幕府と諸藩の申立てを朝廷が上から許す「降勅方式」を主張しますが、慶喜は、



将軍慶喜

(出典:近代日本人の肖像)

従来通り幕府の奉請を朝廷が許す「勅許方式」にこだわりました。

慶喜の突っ張りで四侯会議は、成果を挙げずに終わります。幕府と諸藩との合議体制を目指す島津久光の意図も潰れてしまったのです。久光の威光は落ち、西郷や大久保の力が上がっていきます。四侯会議との協調で諸問題を上手く対処できた可能性があるのに、それを壊してしまった慶喜の責任は大きいと言わざるを得ません。

原市之進の暗殺

慶応3年8月、慶喜の側近、原市之進が暗殺されました。原は水戸藩士でしたが慶喜に取り立てられて、累進を重ね幕府目付に進みました。原の死は、慶喜の手から西郷、大久保に匹敵する謀臣が奪われたことを意味します。

西郷や大久保は、格別な男たちです。薩摩から本当に覚悟を決めてやってきている。暴力や脅し、何でもためらわない。岩倉具視と組んで討幕の密勅も平気で捏造する。最後には主君の島津久光まで裏切る。



原市之進

(国立国会図書館デジタルコレクション)

唯一、対抗できたのが原市之進でした。幕府内部や水戸藩でも性格「陰険」といわれた原こそが、極めて良く似た大久保と渡り合える人材だったのです。

これまで過小評価されるか、無視されがちな原の暗殺事件ですが、歴史的重要性は大きい。それを正確に理解していたのは、やはり慶喜に加えて大久保だったと思

います。

船中八策から大政奉還へ

慶応3年6月、長崎から京に向かった坂本龍馬は船内で後藤象二郎と「大政奉還」の構想をまとめました。「船中八策」です。もっとも最近では別の解釈もあります。

上京した後藤は、薩摩藩の小松帯刀、西郷、大久保を訪ね、「大政奉還」と「王政復古」を説き、薩土盟約を成立させます。後藤は、西郷や大久保を相手に全然一歩も譲らずに大いに喋った。おまけに愛敬もある。痛快な土佐人でした。薩土盟約は、後藤や龍馬がいたからこそ可能だったのです。さらに、後藤は幕府若年寄格の永井尚志と交渉し、9月には大政奉還の建白書提出を決意します。



後藤象二郎

土佐藩の山内容堂の建白書が老中板倉伊賀守に提出されました。10月13日、遂に二条城大広間で大政奉還が発表されました。

機先を制した慶喜

慶喜は、頭の良い男でした。同時に先が見える。先の先まで読める。そういう鋭いタイプの人間だったのです。

大政奉還は、彼の大きな賭けでした。賭けはひとまず勝った。さすがの岩倉や大久保も、政権を返上されたために、彼らがやろうとしていた倒幕の氣勢をそがれてしまった。大政奉還は、「討幕の密勅」にぎりぎり先んじて出された政治決断の傑作でした。

「小御所会議」と鳥羽伏見の戦い

慶応3年12月9日、「王政復古の大号令」が発せられました。同時に京都御所で「小御所会議」が開かれます。会議は紛糾しましたが、最終的に慶喜の官位辞退と徳川家領の削封が決まります。いわゆる「辞官納地」です。その前から彼は公家や諸侯との

会議に出なくなっていた。原市之進はじめ然るべき人物が旧幕府にいななくなったため、慶喜が自ら、天皇の前で、大久保とやり合わなければいけなかったのです。さらに、慶喜は二条城を撤退して大坂城へ移動してしまいます。これも駄目です。諸侯の中には幕府を支持する勢力もいた。「ここでもやるんだ。京都がまた火事になるぞ」と開き直らなければいけません。それが私の言うガラの悪さです。



鳥羽伏見の戦い

この時も、慶喜は先の先を読んでいた。賢すぎるのです。何を讀んでいたかという「世界」です。

世界を見ていた慶喜

イギリス公使のパークスやフランス公使のロッシュとは親交があった。彼らの世界観、対日観も知っていた。こんな連中を前にして、幕府と薩長が関ヶ原レベルの戦いをやったらどうなるか。銃をはじめ武器は全てイギリスとフランスから買っているのです。海外列強のいいようにやられたでしょう。慶喜には気の毒な面もあった。当時、こうした展開を読んでいた人間は他にどれだけのいたか。立場の違いはありますが、西郷は分かっていたでしょう。最後の所で寸止めをして、大規模な内戦を回避するとともに、徳川家を世に残したのです。